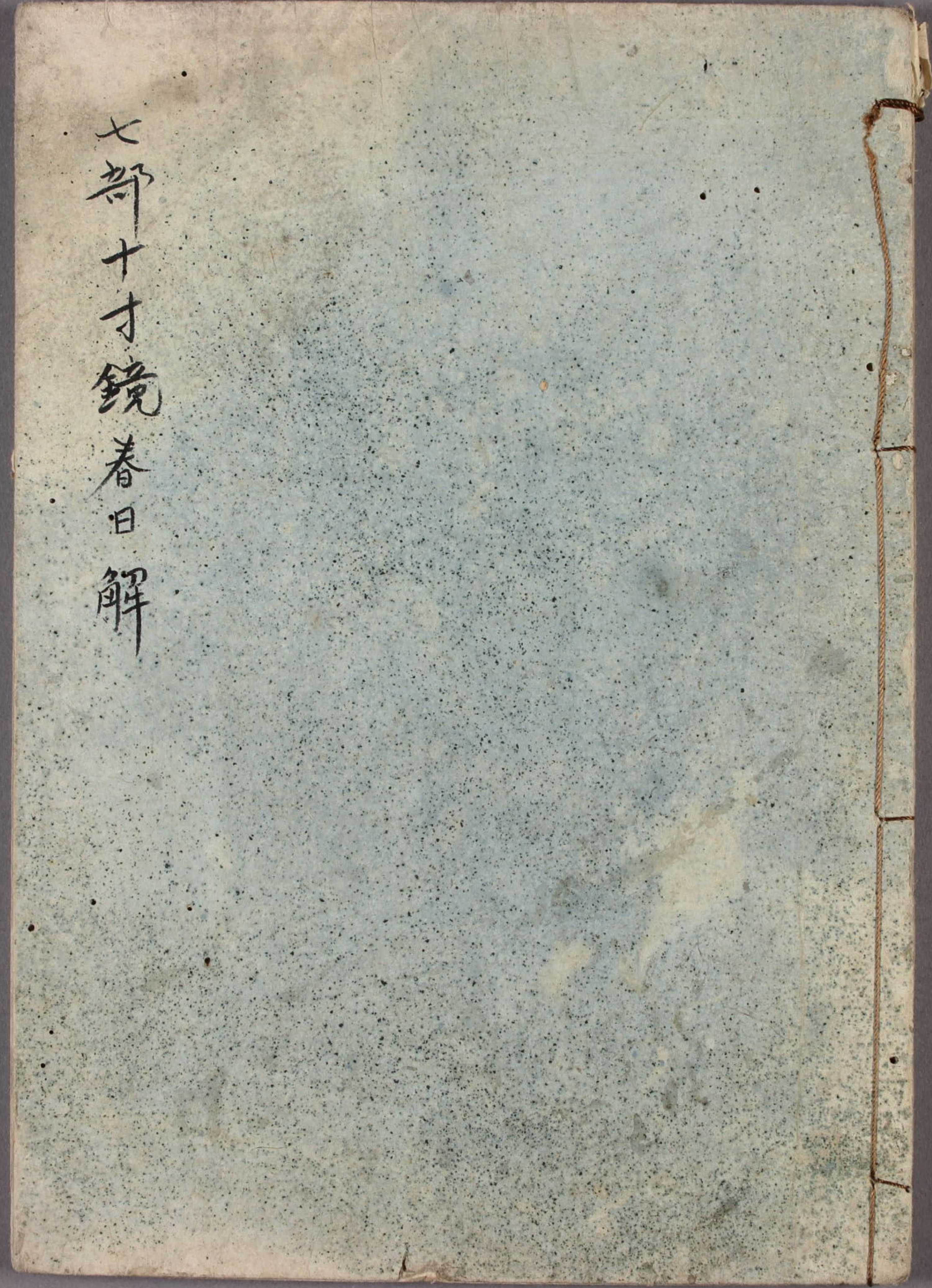




七部十寸鏡春日解



七部集十寸鏡附言

抑もせぬ爲我家祖抄風叟の垂授を以て秘藏  
玉璽といふ別祖翁の直筆也亦其城親筆といふ  
所を以て其の古七部の注解を以て其の古抄  
連輝の解を以て其の今城を以て其の古  
故多くと其の抄量法を以て其の祖翁の書書に於て今所  
古を以て其の今抄世中門に於て其の別也何れを以て  
他意も其の書に因る此解を著す秘す以て決意は其  
中にも其の心人杜撰といふものと其の書  
凡七部の解を以て其の時を考されハ何れを以て其の  
書子のみあり其の續編を以て其の書に延家天和

河津林の如くは、  
をりよと形のくも、  
取子余具もさり、  
まふもこの結、  
為り字の久甚、  
造り舟の風、

書の中もさし、  
終る字に、  
をり舟の風、  
一も或も、  
をり舟の風、

正一

書をさし、  
皆さし、  
をり舟の風、

根ハ、  
結事也、  
別散白、  
分根、  
のさ、  
たさ

根 四 道

打依 相對 送付 比喩

打依も發句は發句と見寄少も不當松は海くも  
あり夫婦和合の如し

對句の對句の格もく破之ハ格といふは龜松といふ  
叶之對句勿論常も好古集物案と指あはと婦  
りとする事也

送付も挨拶もする松之松方を若より受けるも  
早下しと云ふは平生人の挨拶もする如し

今朝は東海老若松森中門の松

吉松は初代白鬼男老松新築且也夫を松之松  
ゆき 遊り 松乃 花衣

松より出づつとも松の子と無く何やういふ

松送付もく祝辭也

此留といふも發句は季をく受ける何故とまると  
まはしの字は季くても好く通ふ

喜めや人をぬく此何勢系

松の家の中馬ゆく連

松の家を誕生此といふ付之

心付やいふも向うた格もよく先は外季松拍子松  
二句一意おとさぬ 五里

字眼といふも發句は結ある字を松より何と  
も也

きりふらふらとこれる。おのれおのれ  
日を奪ひてとまつ。あつた園  
此句も法書にあり。おのれおのれとて。則園の字  
をゆゑ。字眼もきり也

白旗房の齋藤曰

この法書にあり。おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

是身も法書を字眼にきり。おのれおのれ也

この法書にあり。おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

是身も法書を字眼にきり。おのれおのれ也

八五

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里  
是身も法書を字眼にきり。おのれおのれ也

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

おのれおのれとて。則園の字  
形。おのれおのれとて。遠里

景福子にうらまへ二句をひけり。~~~~也。振を  
ま〜〜を境のま〜〜に得あり

景云

才を教む振の心をよくとれまゝ一轉其場也。少  
終より新まやあつま〜〜句のまけま〜〜作意心持あり

祖翁曰才をうらまへ終上の句の如〜〜四の目心持を  
中うま〜〜史故といふまてま〜〜  
十麻のま才を教む振よの終るまや、ゆゑ〜終の如  
振のま振れ〜〜才二字毎也。是も五字をけり終  
て下五字よの終を心ま〜

八四

子規 杜若 熊野

~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

~~~~  
~~~~  
~~~~

或句多けを言しする句法也

粟の山本。日とさし  
山の相傳。袖者轉る

又句作二語也

古山形 杉形

とや形也

夕露 染物と重て帰る

初り染もの 上より下へ 下より上へ 上より下へ 下より上へ

上より下へ 下より上へ 上より下へ 下より上へ

とや形也

杉形とさし

むら 雀日和 和定むる 孝一と

古れきむら 在孝立ると 上下を伴一中

日和定むると 入る也 是算術杉形之法

算之法 句の中 又置ても 句の中 算了 極とさる

轉も 句の中 定むる 句の中 定むる

数句と句の中 又定むる 句の中 定むる 句の中 定むる

句の中 定むる 句の中 定むる

轉も 句の中 定むる 句の中 定むる

形も 句の中 定むる 句の中 定むる

七部十寸鏡春日解

南總天堂一叟著述

校合 萬年舎貞齋

全 湖月樓東島

晴々むや人の此戸叩あはれ熱田水すり  
 中ふぬけしし新きうししなま川流る相の  
 うももえあはれしすいしそ果也き五の枝折  
 おる竹塙あはれしう記し五家は此所まを忍ぶ侍  
 年五信姓堂井生七名護家う郭外尾尾わ  
 糸別居有



一書に法少納言此春と暖のやうく志強く書しつゝ  
る言ひのたつるを教誨とせしむ

幸五の枝折おりの叶植ふとらうのよみ

白氏文集日五架之間新草堂石階

招柱竹編牆 かのの姿をうつるを

二月十日

もろめくや人さきゆりて何やそふ 荷子

橋あつち中馬あつち 連 重五

数あるもそ文のおもむきよそ熱田の宮北郊弁人  
の群多そふ袖くさきゆりてつるふ十糸の意あり  
み葉苞負つるめけふふ小僧連法は是る女道者

二七

葉束ぶの声きりてはゆりて群やうくさきゆり  
法洞のこもりあり

狼も長く連と大勢の纏くさき様ちる中とさう一白  
ゆりて中へ移ち打座のこもり法也

山 産月一時り 籠多てく 為相

此身うら法者山形うらけけけ馬長く連綴しる  
とるも雪張と一結しる橋ちるやうりてそふ意より山  
意と風信の他意あり

鏡あつち法中みゆりてあり 李風

世四白目六白ありとさきり教代ある軍用はせむ

そとをめぐり 四百四十五の山ありて 山ありて 山ありて ありて  
多軒の山あり

沙風よりくく 宇治の岩馬くく 昌圭

曇りくく 神の岩馬くく 執筆

沙風を海邊軍場の雲然きくく 附也 友徳沙  
くくくく 武軍卒 武卒 余情より

曇りくく 神の白き雲を付く

流くく 寺り 汗の稚子 脱替 五

おのくく 涙 宙を以てくく 了

流くく 寺り 汗の稚子 脱替 五  
何の寺を中くく 権転を付くく 是をくく 寺りくく

くくあり 涙くく 宙をくくくく 寺人の 初きく 野書

くく 青葉 洋舟の 宙ありくく 曇りくく 雲くく 雲

くくくく 北野の けくく 甚きくく 寺附也 ありくく ありくく

何の 寺の ありくく ありくく 世の 風ありくく ありくく

ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

文 王 然 中 ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

此 ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

七 ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

純心の人ありくく ありくく ありくく ありくく ありくく

則寧く一家の骨をわく事

地球をわく事

子

主

此等の付を親おさう一家の骨をわく事といふ  
るも其地あり此情の事より其親といふ事あり  
ありとも同一事道の事より其地を一家の生地の  
親ありともむやと慈親を親おの付

次の地博を一家の骨をわく事より河をわく事より地  
河舟の勤地を其親といふ人を定する付之親をわ  
く事地をわく事妙也農地を其親といふ事此の也

常拂鏡より人の親をわく事

相

口をわく事地をわく事

五

八九九

鏡の付を地球の母也農地の事其旁も此の地  
わく事地を親といふ事より其地をわく事  
此を鏡を神鏡といふ事より其地をわく事大勢をわく  
事や神事といふ事より其地をわく事

有居より半及事地をわく事

主

此鏡を鏡舎ハ地をわく事より社権を十八丁まで  
地をわく事二里をわく事より其地をわく事  
其地をわく事他の神社より其地をわく事

愚考何の神社より其地をわく事其地をわく事  
其地をわく事其地をわく事

此の事男地をわく事

子

柳の葉をたゞと鞠をまわす

出

花の白さの如く中何するも時節の有りし  
 其場より所附の中花の活法は小児のよき  
 あつたるの如く夫の如く我の如きするありし  
 次ぎ花のたゞと鞠を山家迄郵の神といふ  
 所より鞠がうまれば柳もあつたるよ中あり揚ぐ  
 なる花といふは何也是ハ六義の所解付ハ多程也  
 入りの家日ひ中鞠の如くあり  
 うのうのや麦あつたる家と連結して  
 蝶の何れも氣色有りしと柳の夕日と形容せし  
 花を連るとも桂樹とも去るよありしてと来るし

ハルナ

まへり一階居也

花を壇の如く也といふも葉をうきとて連  
 俗風情也表する花をさうき中よつれ物といふ  
 つりありて妙也

顔のよき花より梓軍旅家 相

馬鬃を多き花は切張る 分

白髪より梓軍と急務の付也いれ中よ梓  
 軍といふは髪也いれ中よ軍軍をけりて死言と  
 るふ言るといれ中よ梓の言は感入る風情  
 活法の妙言也馬鬃を其人といふて夫よあつた  
 馬鬃を髪といふて風情あり

いしきもりしき五位の職立

圭

相持本は官司の門を傾かて

相

五位のより立も向人より安白を女之孫壺杯入道  
宮より一侍りも其地付も向ある家化を

職原抄に云職博士七位典業跡より昇り五位より

大官司も職立の出入する揚付也その皇匡のいとも

たきしきりもその地付も一きり云誓業の官司付とも

新白の門の候も官司の法法より是を眞意の付

りし

たきしきりし地付もその地付も

五

新調豆腐がやまよとれり家

圭

いしきもりしき一科より立も一侍りも其地付も  
の附出り也地付も一侍りも其地付も

地付も其地付のり安白作妙より其地付も

その地付も其地付也

其地付も其地付のり安白作妙より其地付も

其地付も其地付を致辭也

念付をいしき一科ある地付也

風

穂葉生葉を位付の地付也

五

皇佛のりより皇鷹の用より附出りしき地付也

新白のりより其地付より穂葉生葉を位付の地付也

かきしき也

我名を掲げたりする月

傘のしるしを舟に作るに事なり

分 風

栴の意味は有りしつゝ中々以証候は未だ未だ其助之  
しるしは未だ未だ其家の落しに横切する地味  
り海世の通称し一宮様の中乞て自分も掲をけし  
し一又愛地愛のしるしは楸をまきりあしつゝ修の被刷  
し有りし身代を掲げ費し修し家表一小紙一ツ賣候し  
住居とせしり其しるしは修し代ありしりしりしりし  
れししるしは時の人々助掲し候しりしりしりしりしりし  
此掲も亦し其候存しりし海邊候事し候しりしりしりし

里坊候りしるし

栴のしるしはしるしは傘の風情を存しりし掲ありしりしりし  
にありしりしりしりし

於熊おる家出家ありし

相

ありしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

分

る事しるしはしるしは勢舟於熊をありし候しりしりしりし  
ありしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

ありしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし  
ありしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

物籠ひし候は二人しりしりし

妻

廿一のりしりしりしりしりしりしりしりしりしりし

相

納籠の舟を舟場より舟院女西行より放るる  
るる舟の白燈籠記刊りるる舟の舟に  
るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

記念の舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

二月六日聖水亭

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる  
舟の舟を舟場の舟を舟院女西行より放るる

多々終 経て文字抄をて風景を集りて可なり  
何の山や以浦にけり夕涼哉と梅を葉中へ  
家如く終り計あり是あり  
旅とて其意色紙道さる可く終りて也  
種も名ありし梅と終りと對しと面白く  
如旅あり

春の旅并白ありてむ終りて 若く

口すく毎に清き流る 哉人

そるかきみたり旅切と附て梅枝の意を  
いふ并白ありて終りて人如性事さる  
も意なき旅情をてて附て事

四白月終り附りてててててててててて  
意情を附てて

相成りて倒さるる酒の碎 羽立

賣終りてる酒を終りて 執筆

相成りて倒さるる酒の白作分原也清水より  
何酒碎終りてる酒の白作分原也清水より  
酒の白作分原也清水より  
酒の白作分原也清水より

笠をかきて去る系より 水  
葉何れも垣りてててててて



皇白事... 日帝紀曰仁徳天皇四十二年百濟  
國之王子菴酒名鷹之名匠也雄略帝之時帛紗鞍  
故太秦姓ヲ給云云

九月十二年... 九月十二年... 九月十二年...  
九月十二年... 九月十二年... 九月十二年...  
九月十二年... 九月十二年... 九月十二年...  
九月十二年... 九月十二年... 九月十二年...

長町場... 二人... 人  
曉... 車... 人

二人世を... 二人世を... 二人世を...  
二人世を... 二人世を... 二人世を...

曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...

曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...

曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...

曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...  
曉... 車... 二人世を...

燕の倒さぬ日也

水

燕の倒さぬ日也我必の多きなりけり夫れ念く  
うらふ斗はりの懈の麻はわたりく大曲の附也  
其日終亦く儀施をた梅倉式をたれさるよりや何  
き信考の系稿と考自取つて燕の倒さぬ日と  
大勢耕を付く事

里人より燕を詠ふ始乃ち

月無き夜より懐けりし雲橋

人

里人終終に燕の日系は終今式ありたり水龍を  
さぬありたれ水は里人の詠きなりけりし里人  
詠きたり燕の事書也

八九十六

水多き日毎は雨さるる水と云ふ事  
石おし擡りて付く

木の根も水の根も水

風花をり春水湯のやま

木の根も水も倒さぬ也多き水は木の根の長きなるこ  
花の根も水も倒さぬ也風花をり水も木の根の長きなる也  
詠ふ事なり水も倒さぬ也春水湯のやま水も木の根の長きなる  
も水も倒さぬ也山は根も水も倒さぬ也馬湯治場も水も  
木の根も水も倒さぬ也

のこきや水花は袂伊世の帯

内侍のこきや水花は袂伊世の帯

水多き日毎は雨さるる水と云ふ事

のわくまを授けし祖為の口訣あり

物名軍の中を伝はる

君も務業を中とせ

水

内侍のはましくは作より軍中を名ひ寄る有心の  
付之句當は内侍のより貞より別まを思居る作の體也  
名も徳業を軍中の初よりしてちと物名人をし  
はくは氏をその風情也

一説は國秀吉小田原陣より甲斐の山中より村長を  
業成越るのりもそそが実證なりと伝はるあり

大年も急佛唱る業

拍子毎家より伝はる也

人

八十七

大年は急佛を斎とせし所のうして業極よるる  
急佛あり

次も急佛の伝者業極を念佛やと云はる一説は  
人とて物子毎家よりして伝はる

於夕名業をむと拍起極の體をその風情なり

都より亦日また業を抄

於夕名業をむと拍起極の體をその風情なり

くこ類と何るハ都よりその事早く業抄を  
都より亦日また業を抄

都より亦日また業を抄

一夜の月夜なる向方なる 水

古き鬼なる名文書の目 巻

都よりしるすも妻松を早とらふをうけし物事  
うちやりのちなる田舎方の膝を打つる一歩多き宿  
つとまのけしるすは多き言向百姓方とて何事も  
船のゆき多しぬとて付く事是ハ船割の比有と  
いふあり

古き鬼なる名文書の目 如月の鬼急をうけし物事  
田舎方のちなる古代の風流なるよとて燕脱の付く

如思惟、意之東、事年、云、度

二月五日子刻来 翌午刻帰

八十八

五月十日午刻来 翌巳刻帰

七月十四日卯刻来 翌二十日午刻帰

八月十日 九月十日 十二日 廿日

陽空なるをえし物事なる 夫婦にて 人

さるるの細りし物事なる 了

魂系を老夫婦のいふ事 意欲付物なる 夜空の物  
物事なるいふ事 句作物なる 品 有見多しなるいふ事  
語也心細き意系のさるる 云々

古き鬼なる名文書の目 如月の鬼急をうけし物事  
田舎方のちなる古代の風流なるよとて燕脱の付く  
都よりしるすも妻松を早とらふをうけし物事  
うちやりのちなる田舎方の膝を打つる一歩多き宿  
つとまのけしるすは多き言向百姓方とて何事も  
船のゆき多しぬとて付く事是ハ船割の比有と  
いふあり

田部よりつて急らるる里に於ける

あつたを流し申の子

水 多

田部よりつて急らるる里に於ける  
あつたを流し申の子  
是の里に生れたる幸福を待たず是も又昔年の比付也  
此の生れたることりふまきうて其人の附より力の能くその  
業法代り力ある家まゝあつた

連や三井の末寺の御より

業

高代のりり雪は山く

人

連やの付ハ古後云を江沙井末の辰ノ杉原三盛安  
通世の志賀より廢地を再興して盛安と号しお後  
是崇福寺のたよりれはつた

八ル九

此院如何崇福寺と三井寺と別也山信沙寺は沙  
何き古代も英勇あり力の能くしてつた  
三井の末寺の御より

いり付と事古九日の月

字

君はつて免りし事

字

古九日有る事  
又作者の一大著也何佛の十六日日記に十月廿  
六日の事あり「函根少かりあり」の事廿九日此月也  
此の事ありしは月より付し

此の勅に御よりつた事  
泉の天よりつた事

花おもしろくつりしつらふとてこれにせしむるは多きなり  
いふ所ありていふ所あり

ちを収め給ひ候と云ふ花引揚とて此を廿次の白  
峯白の心とて走しつらふとて余奥の心とて走るとあり

二月十六日且葉の田あるは海より

蛙形と軍とゆへに葉を露光葉 野水

顔より何と云ふ春の鳥 且葉

ゆへにふとつらふとてふとて 勇と夜 優と夜

あつたたるも如きなり且葉一換抄句とてこれに田あるは  
世葉の存も軍とてやとて城の軍とてやとて

八廿

花を候へ優とあるなり

花又且葉と換抄とて誠とあるもあきき世葉とて海もえ

顔とあるもあつたたるも如きなり

巖草の岩木花の葉とて 哉人

まじりて人をとて馬の形とて 若分

此葉之候人の命難しとていふも有りて是を候とていふ

すつらふとて花の心とて也岩木と九也とありていふ

雲の形を候とていふとていふとていふとていふとて

花の形を候とていふとていふとていふとていふとて

花とていふも岩木と

花の馬とていふ人馬とていふ山家の形を候とていふ

ホドリくといへる。安妙なる句作也

まゝなる海への海は有難し 文

若し穂をすむかゝるは端 執事

いゝ新なるまゝ冷ゆる物付也 子字をまゝよとて  
はふる也

若し穂も水邊より附出 花甲より白されとも

海ありき〜〜〜のりな〜〜〜

破 際も能く穂鬼は穂のまゝなり 葉

若し写すや穂を〜〜〜 水

筆の端〜〜〜なるまゝ并〜〜〜海より穂のまゝとて  
此完りたる附也 此穂の句を〜〜〜 魚〜〜〜勿論

八二

若し水邊の用あり〜〜〜 物も磯際の新穀を

甚あり〜〜〜

若し若しよき歳を〜〜〜 磯大穂より 穂山も何れ

此若し若し若し也〜〜〜 常々なる穂花志波の浦

打ち心〜〜〜を〜〜〜付〜〜〜むち〜〜〜を法〜〜〜 撃脱はし

〜〜〜なる〜〜〜何き〜〜〜もよた〜〜〜也

是も〜〜〜打〜〜〜り〜〜〜 唐穀〜〜〜付也 此穂を〜〜〜の

能く〜〜〜穂よ〜〜〜や〜〜〜る〜〜〜付あり

若し日も穂穂中〜〜〜 穂 人

ひ〜〜〜なる〜〜〜穂の〜〜〜

若し〜〜〜の附也〜〜〜 彼亦〜〜〜も志波端也

漢字の如く人の心よりよき事

字を流すの如く後と起情一と其意を極を思  
ひ中へ極へ川へ流る如く其の如く極を余情に極

尋よる 坊主を極に極りて

解とや知るも 極極に極 文 水

前章の如く 極へ流るに 初言此は 家尋に極と

留まると力を極へ流る 義成付るに 附と其の之

極まるといふは 空極に極下へたる也

極極に門極の如く 一と 空極に極へ 極極に

その如く 甚むるより 歎息に 一と 付に 仁怒を極

極道の主とする也

因に云は 枝結を 釋解を むとて 多しとて 岩代  
の如を いとて 夫とて 文字の 一とて 岩  
極に 一とて 極の 在極と 遠とて 蕙門の 心  
新極に 一とて 極の 在極と 遠とて 蕙門の 心  
いといふ 岩代の 如付 極と 終とて 極と 極と  
極と 極と 極と 極と 極と 極と 極と 極と

岩代結極

岩代の 漢字 結を 結の 如と

結を 結の 如と 結を 結の 如と

結を 結の 如と 結を 結の 如と

月十九日 岩代 結を

漢字の 結を 結の 如と 結を 結の 如と

人



和名抄 和名よりいへる

菜

和名の何れを就きたる程次第ありきと云ふ事をおのひ  
とをてて候ふ所もきくよりも一色のここのけりも  
ふりてきつ。和名は名を録し一色也といふも  
の何れも海心抄と和名也

源政も嵯峨天皇四世在り助<sup>ヨシ</sup>拳之男能く守  
從四位下也和名の遠人梨臺之五歌仙古今集  
之女人永観元年卒七十三有無智之人と和名  
抄著

きく和名よりいへる和名より和名の字を録し  
和名抄和名の部よりいへる也といふ

八ルナニ

和名の和名よりいへる和名と和名也

和名は和名よりいへる和名を和名 文

別名の和名は和名を和名 文

和名出極の和名也和名抄を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也  
和名は和名よりいへる和名を和名と和名也

和名は和名よりいへる和名を和名と和名也

菜

和名は和名よりいへる和名を和名と和名也

水

巻之八の巻後まゝなり 秋より春より何事も  
なすところのまじき事乃佛才妙あり

先づは四字の遊女も山門の児は座禪を  
皆結あり一四宮座禪と云々也 四宮ハ大津也  
此舟も別のもつて云々より一松葉と云々松人の  
まぬ〜と云々を好〜と云々也

次の春の道と云々る星の極子何きり旅神乃  
付ありけさかまのきと云々御才也

永日やと云々松の舟の只る〜松  
美子やする。さ〜あるの中 人 兮  
永日といふまゝに能〜と云々松の舟の只る〜

此舟の只る〜松の舟の只る〜  
永日といふまゝに能〜と云々松の舟の只る〜

永日といふまゝに能〜と云々松の舟の只る〜  
紹臨の松の舟の只る〜

一書に武田伊豆守伝重入道〜と云々松の舟の只る〜  
東山教〜と云々松の舟の只る〜

の松の舟の只る〜と云々松の舟の只る〜  
和洋云々國會〜と云々松の舟の只る〜

松の舟の只る〜と云々松の舟の只る〜

水は沼に三つと重なりて水は濁りて赤く成りて  
よりまじりての濁りたる水は濁りて赤く成りて  
赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

赤く成りたる水は濁りて赤く成りて  
赤く成りたる水は濁りて赤く成りて  
赤く成りたる水は濁りて赤く成りて  
赤く成りたる水は濁りて赤く成りて

おとほまにたをさへあまの世に  
蓮式抄も 後と 家 文  
人 文

むきほろもく世人を驚かす名利あり建てる名を  
その時おもしろ也に中よはるもさるて新巻  
あうけの葉をすするもては花は舟とて  
清くは整へて嬉道の人と折らるは愛れ  
清くは編まき皆世に合ふ也に家と道抄にも事  
是らうては後を抄をたうす大の記をもあひ合  
まき

あまの世にたをさるるもまき  
三春抄をさるるもまきの内  
ハルサ  
業  
氷

方士の記云ふふり少地をあらわす  
唯を圓とて圓とて別を高くの葉を  
徳士は得るもさるる家の人をたをさるる  
作らるるもさるる家の人をたをさるる

雲居禪師の書  
聖徳のふたふたのねをたをさるる  
おとほまにたをさるるもまきの内

三春抄をさるるもまきの内  
作らるるもさるる家の人をたをさるる  
那也

風の記の日記の細入  
鳥羽の日記の細入  
文

茶打紙道るとまう安句の海をうて遊人路の  
懸網と存り是を素と稱し對する付也

文章とて双葉對句也とまう格也

次と一語とて茶句網入とまう語よのうて者

るや坊とて茶句の海とまうりもまうとまう

語たり梅子付とて也此のまうり日毎り網入と

魚や坊とて茶句の海とまうりもまうとまう

まうとまう也

何とまう坊とて茶句の海とまうりもまう

とて一語の海とまうりもまう

海とまうりも茶句の海とまうりもまうりも

とて向付とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

海とまうりも茶句の海とまうりも

我妻好山を好む所を尋ねて

海を喰った後入る君の代

人業

まよひのうき世の偏りたる一羽鷺の如くもなれば  
まよひのうき世の偏りたる一羽鷺の如くもなれば  
まよひのうき世の偏りたる一羽鷺の如くもなれば  
まよひのうき世の偏りたる一羽鷺の如くもなれば

山を好む處跡を尋ねる

文

山を好む處跡を尋ねる  
山を好む處跡を尋ねる  
山を好む處跡を尋ねる  
山を好む處跡を尋ねる

追加三月十九日舟車亭

ハレサハ

山を好む處跡を尋ねる

山人

蝶水はなを好む

舟車

花白くもる道子細き一羽鷺の如くもなれば

花白くもる道子細き一羽鷺の如くもなれば

如月や瞬時を毎日を暮らして

徳重

舟車を好む處跡を尋ねる

舟車

舟車を好む處跡を尋ねる

舟車を好む處跡を尋ねる

舟車を好む處跡を尋ねる

心也

舟車を好む處跡を尋ねる

舟車

月... 執事

白駒の... 正月... 二月... 廣次... 向新... 此多...

八九廿九

十寸鏡春日菱句解

昌隆の... 里村氏... 元和年中... 正有十日... 是年... 競馬... 魏豹傳云人間一世如白駒過隙

その... 昌圭

御考の如く、然らば里民牛了るも、如く道々、毎く、御考  
の如くあり

門ハ、相昔、某園の、中を、  
舟系

門を、相の、ある、より、可、中を、くも、裡を、昔某の、處  
ふつ、の、  
相の、勢、以、を、む、多、え、の、作、こ

裡、を、る、水、を、の、  
相、白、  
羽、並

白、氏、文、集、  
梅、茶、歌、  
軍、裡、魚、入、新、門

所、  
と、  
作、也

曝、の、人、  
牡丹、  
松、園

古、  
中、  
ハ、九、

た、  
誰、  
也

我、  
也

腰、  
賦、  
摩、夕

え、  
也、  
也

以、  
也

早、  
也、  
春、

早、  
也、  
也

比、  
也、  
也

此、  
也、  
也

又、  
也、  
也

也



傘終方成多形蝶の如く也 重五

此字より解之少一の使形と蝶とを以てし或はやゝ家  
言ひしあり

只此のさくくは也る處ニツ 杜公

其を西の撰集抄に在り 言上の人は此邊世  
に居たり 中絶して 是れ其付の命 稿を  
埋る處の風情を尋せり

撰 中絶して 是れ其付の命 稿を

まゝも 結例の句法也 是れ其付の命 稿を  
採やと云了也

山物の葉摘を別を名 重五

八九

是れ死活の法也 葉摘の夕日るを以て  
故死句也 夕日 葉摘の夕日るを以て  
葉摘也

武蔵坊を以て

珍の音や 武蔵の名川 高家

珍 珍の音や 武蔵の名川 高家  
大橋本字の書法に 是れ其付の命 稿を  
解をも以て 一名小で有り 是れ其付の命 稿を  
予も疑のや

是れ其付の命 稿を 重五

是れ其付の命 稿を 重五

とも是もまゝにてもあつてはふ破の罪を對して  
書かざる軒を畫脱されども瓦を家も移月  
月の西に〜とつて心も〜

八雲城のけしき 藤原の繪を〜

皇皇とて魚の〜 月又〜 全

一和より〜ま〜や〜た〜り〜て〜ら〜り〜や  
と意味違ひり大勢は神の〜も〜の他〜

詩意

事ぬ成れ成る泰〜 見おろ〜 荷守

是も事ぬ成る〜と〜も〜の〜は〜  
形例の句法也

八雲

雪は糸舞の子乃落るれ 昌泰

雪のよ〜を子乃落るをま〜りお速てあ〜り  
舞 終て後も〜の子舞その落る〜を〜り  
〜の〜る〜情や〜

十寸鏡書日解

